



居酒屋をめぐる中国社会史  
-下田淳『居酒屋の世界史』をめぐるって-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2013-02-06 キーワード: 作成者: 竹内, 康浩 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008450">https://doi.org/10.32150/00008450</a>

# 居酒屋をめぐる中国社会史 ～下田淳『居酒屋の世界史』をめぐる～

竹内 康 浩

北海道教育大学釧路校史学研究室

## The Social History on the TAVERN in CHINA

Yasuhiro TAKEUCHI

Department of History, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

### 概 要

本稿は、最近公開された下田淳氏の『居酒屋の世界史』を受けて、簡単な書評を試みるとともに、中国部分に関する資料紹介や補充を行い、かつ中国史上における居酒屋の研究の持つ重要な意義を明らかにし、今後の研究の方向を提示したものである。

#### はじめに

最近、下田淳氏の新著『居酒屋の世界史』（以下、本書、と称する）（注1）が公開された。本書は、「はじめに」の氏の言によれば「世界の居酒屋の概説書」であり、「居酒屋の比較文化論」の試みであるという。氏の専門であるドイツ史研究において、民衆文化に居酒屋が深くかかわっていることに気付いたことが、本書の成立の大きな動機であると述べている。著者の下田氏には、本書成立に先立って『ドイツの民衆文化』（注2）があり、その第五章が「ドイツの居酒屋文化」と題されていて、その問題を扱っている。

居酒屋を歴史研究の対象とすることには、重要な意義があると思われる。それは、単なる飲食業という一職業を扱うことでもなければ、飲食文化に関わる風俗史にとどまるものでもない。当時の人々の人間関係の形成に居酒屋が社会的に重要な意味を持っていたからであり、また、居酒屋を舞台としてそこに集う人々による諸活動が重大な政治史的な動きに発展した事例が多く存在するからである。本書の目的もまさにそういう問題意識に発し、その意味で本書の刊行は大いに意義あるものと言えよう。しかも、著者である下田氏はヨーロッパ史(ドイツ史)研究者でありつつ、ヨーロッパに関する叙述に満足せず、イスラム圏や中国・韓国、さらに日本にまで言及して、書名にある通りの「世界史」を指向していることもまた評価されよう。『～の世界史』と称しながら、ヨーロッパに関する叙述のみに終始し、アジアにまるで言及しない本も少なくないからである。

このように、本書の刊行には大きな意義があると考えら

れるけれども、一方で本書には問題がないわけではない。私は、本書の問題関心や成果を今後さらに発展させることを希望しつつ、ここでは疑問点・問題点を指摘することに重点を置いて述べてゆく。以下、批判の言辞が連なるが、それは本書を貶めるためではなく、むしろ各方面の内容に関して今後の一層の充実を強く希望してのことである。以下、本書の主要部分を占めるヨーロッパ部分と、評者の専門分野である中国に関する部分の二つに分けて述べてゆくこととする。

#### 1 古代オリエント～ヨーロッパ部分について

本書は第一話から第六話までが通史編、第七話から第一〇話までがテーマ編という構成をとる。通史編のうち、前半三話がヨーロッパを扱い、以下、イスラム圏、中国・韓国、日本、という地域(文化)別の叙述構成である。

まずはヨーロッパに関する部分について触れておく。但し、私の能力により、本書で述べられている事実関係については下田氏の説の検証や増補が全くできないので、専ら「居酒屋」を扱うに当たって触れておくべきポイントの指摘にとどまる。

最初に指摘しておきたいのは、居酒屋という場所・施設に関する説明・情報の不足である。居酒屋はどのような場所に存在したか、建物(施設)はどれくらいの広さで、内部はどのようになっていたか、どういうメニューがあり価格はいくらであったのか、客層はどうであったのか、そしてどのように酒を飲んでいったのかなど、居酒屋の具体像を

つかむための基礎情報がまずは確保されねばならないはずである。言うまでもなく、資料的な限界により、それらがすべてわかるとは限らない。しかしながら、まずはそうした基礎情報を確保し、言及される居酒屋について読者に適切なイメージ理解を与えることが肝要ではないであろうか。基礎的なイメージを作り上げることは、大変重要であると考えられ、文学や音楽に現れる居酒屋がもっと取り上げられてもよい気もする(注3)。

下田氏は本書において、「農村への貨幣経済の浸透」「居酒屋の多機能性」「棲み分け」というキーワードを頻繁に掲げる。それらについては、「はじめに」において明確な説明をしており(5~7ページ)、こうしたキーワードに、居酒屋の社会性を見ようとする著者の姿勢がはっきりと見て取れる。居酒屋は、やはりそもそも酒と食事とをメインとする施設であり、そこに人が集い、次には集う人を目当てにしてまた別な商売などがつけ加わり、氏の言う「多機能性」が出来上がるのであろうから、まずはそもそも人が集まる、そのメインの部分を確認してほしいと思う。特に本書の後半は「テーマ編」として「第七話 教会と居酒屋」、「第八話 売春と居酒屋」、「第九話 芸人と居酒屋」、「第一〇話 犯罪・陰謀と居酒屋」というように、「酒を飲む場所」としてではなく、その社会的な機能の方面に関心が大きく傾いてゆき、居酒屋はそうした問題にかかわる「場」としての位置に後退してしまっている。例えば、「はじめに」において「ドイツ農民戦争やフランス革命が居酒屋からはじまったといったら驚くであろう。農民や革命家は居酒屋で計画を練り、民衆に呼びかけたりしたのだ。」(3ページ)と言い、居酒屋の果たした役割がいかに大きいものであるかのように読者には思わせる。しかし、いざ本論ではこうした点についての記述はむしろ少なく、「第一〇話 犯罪・陰謀と居酒屋」でも209~210ページでほんの数行、それも出来事として触れているに過ぎず、そのことの持つ意味・理由についてはまるで語らない。勝手に想像するならば、革命家が居酒屋に集まっていたのも、夜間に多くの者が集まっても不審に思われなかったという、それだけの話にも思われる。そうではなく、居酒屋の経営者の出身や営業にまつわる利権などをめぐって、権力と対抗せざるを得なくなる雰囲気があるところでは醸成されてしまうのだ、ということでもあればそれこそが重要ではないであろうか(注4)。例えば、中国において運送業者が、業務上、信用と安全の保障を確立するため、必然的に秘密結社の要素を持つようになったことは指摘されるところである(注5)。居酒屋にそういう要素がなかったか否か、その探究はあってよかったのではないであろうか。そしてそれが発見されたならば、まさしく正しい意味で、「ドイツ農民戦争やフランス革命が居酒屋からはじまったといったら驚くであろう。農民や革命家は居酒屋で計画を練り、民衆に呼びかけたりしたのだ。」という前記の指摘が意味を持つことになる。

## 2 中国の居酒屋について

本書は、第五話が中国と韓国に当てられている。何ゆえ「韓国」と称するのは定かでない。扱われている時代は高麗から「李氏朝鮮」の話題ばかりであるから、王朝期の朝鮮ではないのか。少なくとも「韓国」というのは不適切である。以下、中国部分に絞って、問題点を指摘していくこととする。

中国部分の小見出しを列挙すると次のようである。

彩陶文化の遺跡から出土した酒器(128~131ページ)

詩仙李白(131~133ページ)

中国の葡萄酒と蒸留酒(134~135ページ)

宋代の外食・居酒屋文化(135~137ページ)

寺院と茶館(137~138ページ)

茶館という都市文化(139~141ページ)

この見出しにも既に垣間見えているように、居酒屋ではなく「酒」そのものに傾斜した内容になっている。さらには、茶館についての言及が存外多く、その意味では本書本来の趣旨からは逸脱した内容であるとも言えよう。それ故、ここで取り上げられている内容につき一つ一つ検討しても必ずしも実りある結果にはならないと思われる。そこで、むしろ本書で取り上げられていない話を紹介することで、材料提供とともに、著者の考えの適否について考えてみることにしたい。

著者は、石毛直道氏の見解(『歴史学辞典』弘文堂)を引き、中国で居酒屋が成立するのは前漢時代(紀元前202~紀元後8年)の中頃である、との説を紹介している(131ページ)。しかし、中国古代史研究者であれば必ず想起する話が、ここには引かれていない(石毛氏も言及していない)。『史記』高祖本紀にある、前漢を建てた初代皇帝、高祖劉邦の若い時の話である。

好酒及色、常従王媪・武負貰酒。酔臥、武負・王媪見其上常有龍怪之。高祖每酤留飲、酒讎数倍、及見怪、歲竟此両家常折券弃責。

劉邦は酒と色を好み、いつも王媪・武負の店で「つけ」で酒を飲んでいて、酔い倒れていると、武負も王媪も劉邦の上に龍が廻っているのを見て不審に思った。劉邦が店に来て飲んでいると、酒の売り上げは数倍にもなった。龍の不思議を見て以降、年末になると、王媪・武負の両家とも「つけ」の印の券を折って貸し分を放棄したのであった。

農民から身を起して皇帝にまで上り詰めた稀有な人物の一人として中国史上著名な劉邦(前247~前195)は、若い時、飲み屋に行っては友人らと大いに飲み、酔いつぶれて寝てしまうこともあったという。敢えて原文を引いておいたのは、まずここに居酒屋を表わす明確な語がないことは確認しておきたかったからである。しかし、文中にある王

媼・武負がいずれも女性であり、また彼女らがそれぞれ経営している店に劉邦が通っては酒を飲んでいてことを示すものとして歴代解釈されてきている文章であることは疑いがない。清朝の史学の傑作である『二十二史劄記』の著者、趙翼も「武負・王媼、皆酒家。」と注釈を付けている。劉邦が客として現れると、彼をむしろ目当てに店には客が多数訪れ、結果、店の売り上げは数倍になったというのだ。

この話からわかる重要なポイントを挙げてみよう。第一は、紀元前三世紀後半の中国に居酒屋があったことである。第二に、これは高祖劉邦の地元での話であり、沛県という地方の町にも居酒屋があったことである（注6）。第三に、武負・王媼といった女性（中年女性）が経営していることである。第四に、武負・王媼について『史記』は「両家」と言っているから、居酒屋は一件ではないということである（注7）。第五に、酒は、おそらく顔がきけば、つけで飲むことができたことである。この当時は紙がないので、「券」という木製の札を用いていたとされる。第六に、これは直接居酒屋とは関係ない習慣であるかもしれないが、つけの支払いは年末に行うとされていたことである。第七に、これはやや想像に類するが、劉邦のつけを破棄しても店の利益は上がったというのであるから、劉邦以外の彼の取り巻きのような客たちは、みなきちんと支払っていた、それもつけではなく、確かに（おそらくは銭で）支払っていた、に違いないということである。若年時の無頼の劉邦の取り巻きも含めて全てがつけでは、経営は不安定となり、親分の劉邦のつけを破棄するとまでは至らないであろうからである。

以上の諸点により、この話が居酒屋の歴史について検討する際にどれほど重要なものであるかは極めて明瞭である。無論、『史記』のこの話は実話とは受け取りがたいところがある。この話の趣旨は、劉邦には早くから皇帝となる兆しが見えていたということを示すことにあり、酔い潰れた彼の頭上を龍が廻っていたというその部分が重要な個所であるが、そうした奇譚は彼が皇帝になった後で創作しこじつける類のものであるのが常套であるからである（注8）。しかしながら、もし居酒屋という施設・場が当時存在しなかったならば、話の場面がこうした設定になるわけではないのであり、女性経営者の存在も、つけによる支払いも、ともに当時存在しなかったならば、この話の読者は、劉邦にまつわる神秘譚に感心する前に、設定されている状況を把握できずに混乱するばかりで理解不能となろう。つまり、龍にまつわる部分はともかく、こういう話の前提となっている場面設定は誰もが奇異に思わぬ普遍的なものではなければならない。この話の「創作」は、劉邦が皇帝になって以後であることは明白であるが、早くて紀元前二世紀の前半に置くこともできようし、最も遅く受けとるならば、『史記』による創作ということになり、それは紀元前一世紀初め、前漢のちょうど中頃になる。劉邦をめぐる異事は『史記』にはほかにもいくつも見えており、こうした作為を一切司馬遷に帰せしめる必要はないと考える。創作であ

ることを考慮しつつも、紀元前二世紀の半ばまでには、「居酒屋、女性経営者、つけ払い」が珍しくない（奇異に思われぬ）程度になっていたとみてよいのではないかと。

また、ほぼ同時期の話が『史記』刺客列伝に見えている。のちに始皇帝を暗殺に行く荊軻は（正確には彼が狙った時はまだ皇帝ではないが）、燕の国に行ったときに友人らとよく酒を飲んで歌っていたという。

荊軻は燕に行き、そこの犬殺しの者や筑（琴のような弦楽器）の名手の高漸離と仲が良かった。荊軻は酒を好み、毎日彼らと燕の市場で酒を飲んだ。たけなわになってくると、高漸離が筑を弾き、荊軻がそれに和して市中で歌って大いに楽しむのであるが、やがて周りも気にせずにお互いに泣きだすのであった。

『史記』刺客列伝

荊軻も高漸離も酒が進んで酔いが回ると世を憂えて悲憤慷慨し出すという話であるから、彼らが「燕の市場において酒を飲んだ」というのは、もちろん酒を提供する店、要は飲み屋がそこにあったということに相違ない。まして、荊軻は市井の侠（やくざのような存在）であるから、高級店に出入りしているはずもなく、まさしく居酒屋的店に相違あるまい。これは大きな都市での話である。

なお、造り酒屋に関する話が、戦国末期の諸子の一人、『韓非子』に見えているので、それも引いておこう。誤だけを掲げておく。

宋人に酒を売る者がいた。酒の量り方をごまかすことなく、客への応対も丁寧で、酒も大変に美味しく、店の看板の幟も高く掲げてある。それなのに酒は売れないで、酸っぱくなってしまふ始末である。なぜこんなことになってしまうのか、知り合いに尋ねてみると、長者の楊倩が「お宅の犬は猛犬かな？」という。「猛犬ならば何故に酒が売れないのです？」と言うと、「客が怖がるのですよ。もしも子供に銭を持たせて壺を下げて酒を買いに行かせたとしても、犬が待ち構えていて噛みつこうとする（客は逃げる）。だから酒もいたんで酸っぱくなり、売れなくなるという道理さ。」

『韓非子』外儲説右上

この話は、一つのたとえ話として出されているだけで、もちろん実話ではない。固有名詞もなく、時代も不明のたとえ話にすぎない。そもそも主人公の「宋人」は愚者の代名詞として話の中でよく持ち出される対象であり（宋は殷の末裔であり、亡国の民だからである。「守株」も「助長」も主人公はすべて宋人である）、そこにこの話の架空性をはっきり出ている。しかし、造り酒屋が存在すること、そこに客が銭と容器を持って買いに行くこと、この二点までもが現実にはなかった創作であるならば、読者はおよそ理解できない話にしかたならない。少なくともそこは実際に

あった状況であると考えねばならない。韓非子は戦国末期、紀元前三世紀後半の人であるから、少なくともその時期には、造り酒屋をめぐるこういう状況が出来上がっていたと考えてよかろう。酒は確かに商品として製造・販売されていたのである。そして自家製造できない(しない)ものは、そこへ買いに行くのである。次のような話もある。これは後漢時代、二世紀後半の話で、たとえ話ではなく、実在の人物のエピソードとして語られる。

劉寛は、客が来たので奴隷に酒を買いに行かせた。ところがこの奴隷、何を思ったのか、しばらくして自分自身が泥酔して戻ってきた。客は激怒し、「この畜生めが！」と罵った。劉寛は、後で、罵られた奴隷が自殺でもしていないかと、他の使用人に様子を見させた。「畜生と罵られるなんて、あれほどのひどい恥辱はないからね。きっと死ぬんじゃないかと恐れたのだよ」と周囲に語った。

『後漢書』劉寛伝

劉寛は桓帝(在位146～167年)の時に尚書令、靈帝(在位168～189年)の時には太中大夫を拜命するなど、後漢政府の超大物である。その劉寛にしても、客をもてなすのに奴隷を遣わして酒を買いに行かせている。政府高官の貴人であっても、酒を買って自家で飲んで(客に供して)いたのだ。重要な話として記憶されたい。

以上、まずは古代の話を紹介してみた。実話とは考えがたい部分もありながら、逆に、話のごく当たり前の場面設定として居酒屋や造り酒屋が登場していることこそ、それらが当時の社会になじんだものであったことを確かに物語っているのである。

さて、居酒屋について次に紹介せねばならないのは、『世説新語』に見える話である。『世説新語』は、後漢から三国・六朝期の有名人の著名なエピソードをまとめた本であり、例の竹林の七賢のエピソードもここに多くみられる。酒にまつわる話は極めて多数載せられているが、ここでは居酒屋に関係がある話だけを掲げる。

まず、居酒屋の名が見えるものがある。

王戎は尚書令となり、官服を着、公用車で出かけた折、黄公酒壚のところを通りかかった。後続の車の人にこう語った。「その昔、私は、嵇康や阮籍とこの酒壚で大いに飲んだものだ。竹林の集いの末席に参加できたのだ。嵇康は若死にし、阮籍も死んでからというもの、自分は世間につながられてしまい、今日こうして目の前に居るのに山河を隔てるような遠く遙かな思いがするよ。」

『世説新語』傷逝

王戎(234～305)は竹林の七賢の一人であり、高位高官の人物であるが、蓄財に熱をあげ、「俗物」として軽んじられる人物でもある。この話の信憑性については、『世

説新語』の注が疑問を投げかけているが(注9)、先の『史記』の事例と同様、話の場面設定に関わる部分では用いるべきところもあろう。王戎らが大いに酒を飲んだ場所として「黄公酒壚」、すなわち「黄さんの飲み屋」という名が挙げられている。王戎に「経王公酒壚下賦」なる作品のあったことを同じく『世説新語』文学篇は言う(実際には「経黄公酒壚下賦」の誤りだが)。おそらくは店主の名を付して「誰その店」という店名で呼んでいたであろう。

そして、三世紀の後半に、こういう店が多数できていたであろうことは次の話によってうかがうことができる。

阮宣子が出かける時はいつも、百錢を杖の頭にぶら下げており、酒店に入っては一人で大いに酒を楽しんだのであった。その一方、当時幅を利かせていた人たちのところには訪れようとはしなかったのであった。

『世説新語』任誕

阮宣子は阮修(270～311)のことで、当時流行した「清談」と呼ばれる議論を得意とした人である。訳文中の「酒店」は、原文も「酒店」であり、こういう用語によって飲み屋を指している。この話では、阮がいつも同じ店に出かけていたと解しては、後半の部分と対比されない。「出歩くたびにちゃんとお金を用意していろんな飲み屋には入って楽しむくせに、当代の顯貴には背を向けて近づこうとしなかった」という、世間の人が行いがちな高官や有力者の機嫌取りなどはせずに自分の楽しみに耽っていたという、彼の反骨(ひねくれ)ぶりを示す話と解すべきであるからである(この話が所載の「任誕」とは、ほしのまま、気まま、の意味)。世間的に言えば、「あちこち飲み屋に出かけるくらいの甲斐性はあるくせに、肝心なところには行きやしない」という評価が前提であろう。いささか想像が先に立ってしまうが、この話の含みはこういうことではないであろうか。とすれば、やはりこの当時、一つの町に居酒屋は何件も存在していたに相違ないと思われる。また、銭を持ち歩いていたのは、彼が常に居酒屋で現金払いをしていたことを示している。さらに次の話も注目される。

阮籍の隣の家の妻は美人で、飲み屋を開いて酒を売っていた。阮籍は王戎とともにこの店で酒を飲んでいて、阮籍は酔うとこの婦人の横で寝入ってしまう。その夫が(阮籍の下心を疑って)不審に思って観察していたのだが、阮籍にはなんの下心もないのであった。

『世説新語』任誕

竹林の七賢の代表格である阮籍(210～263)の話である。飲み屋の「看板娘」的女性がいた話である。先述の劉邦の話にも通じ、店に居る女性が客を引き付ける存在であったこともわかっていよう。なお、飲酒のあり方について、『世説新語』からもう一つ話を引いておこう。

劉公栄は、人と酒を飲む際に、賤しい者たちもメンバーに入れていた。ある人がそのことで彼を非難した。劉公栄はこう答えた。「私より優れた者とは飲まないわけにはいかない。私より劣る者とは飲まないわけにはいかない。私と同じくらいの者とは飲まないわけにはいかない。というわけで、一日中、飲んで酔っ払っているわけさ。」と。

『世説新語』任誕

劉公栄は劉昶のことで、阮籍や王戎と同時代の人である(彼らからからかわれた話が『世説新語』簡傲篇にある)。訳文の「賤しい者たち」は原文では「穢非類」である。身分的に釣り合わない、下賤の者たち、というところであろう。そういうものたちと同席してはならないと非難されたのであるから、逆に言えば、酒席においても出席者は身分的に相応しい同士でなければならないということになる。気が合えば誰とでも同席するというのは、当時の飲酒の作法としては外れるものであることがうかがえよう。飲酒の場は「仲間意識」の形成・確認の場なのである。

さて、では居酒屋に関してさらに紹介すべき資料を掲げよう。物語は宋代のこととして設定されているが、本それ自体は明代の成立であろう、小説『水滸伝』である(注10)。運命の一〇八星である英雄豪傑たちが梁山泊に集結する、この物語には飲酒場面がふんだんに出てくる。街で出会った豪傑たちはすぐに飲み屋に入って話を始め、交流を深める。そこから飲み屋の様子がいろいろわかるのに、本書がなぜ『水滸伝』を用いないのか、不思議としか言いようがない。

居酒屋のシーンは無数にあると言ってもいいが、その様子がよくわかる例として、まずは大きな町の有名な料亭に関する描写を掲げる。魯達(提轄)と史進・李忠の三人が連れだって店に入るシーンである(第三回)。

三人がぶらぶらとやってきたのは、州橋のたもとの潘という有名な料理屋。門前には目じるしの竹をかけた、酒の旆(のぼり)がはたはたと空にひるがえっている。

(中略)

三人は潘料亭へあがり、きれいな一室をとって席についた。魯提轄が上座、李忠がそのむかい、史進は下座に坐った。給仕は挨拶をして、客が魯提轄だとわかると、

「提轄さま、酒はいかほどお持ちいたしましょう」

「まず四角(一角は約五合)持ってこい」

給仕はつまみものや肴をならべながら、たずねた。

「お菜はなんになさいます」

「うるさい。あるものなんでも持ってこい。金はまとめて払ってやるから。つべこべとよくしゃべるやつだ」

給仕はひきさがると、すぐ爛をして持ってきた。つまみものや肉料理もどんどんはこんできて、卓いっぱいにならべた。

ほんの短いシーンであるが、ここから当時の飲み屋の様子が実によくわかるのではないか。店はそれとわかるように目じるしを大きく掲げて客を待つ。店はおそらくは主人の名によって呼び、ここには潘という店が登場する。そして、この潘という店では、「きれいな一室」とあるように、個室もあるのだ。そしてそこには給仕がついて注文を取るなどサービスをする。あたかも「お通し」のように、つまみをずらっと出し、酒の注文を聞く。爛酒を飲んでいるのも注目されよう。メニューはないようだが、客のリクエストによってさまざまな料理を提供したのであろうこともうかがえる。そして、この直後に大事件が発生してゆくのだが、そのきっかけは、魯提轄らが酒を飲んでいる隣の部屋から女性の泣く声が聞こえて来て、給仕によればそれは「酒の座をとりもつ流しの歌うたい」であるという。つまり、こういう店の宴席に流しの歌手がやってきて芸を披露して席を盛り上げ、金を稼いでいた、ということがわかる。店にお抱えの歌手がいたのではないらしく、居酒屋にまつわる一層自由な雰囲気うかがえるというものである。

『水滸伝』の酒屋と言えば、しびれ薬入りの酒を飲ませて客を殺し、荷物や金品を奪う殺人飲み屋が有名である。虎退治の武松が護送される途中に立ち寄る居酒屋もその典型である(第二十七回)。化粧をして着飾った女が客に呼び掛け、「お客さん、休んでいらっしやい。うちには上酒もあれば肉もあり、点心になさるのなら大きい肉饅頭もございますよ」という。中に入った二人の役人と武松に対し、女が話しかける。

女が、にこにこ笑いながら、

「お酒はいかほど」

といった。武松は、

「いくらもなにもない。どンドン爛をしてくれ。肉も四五斤たのむ。勘定はまとめてはらう」

「肉饅頭の大きながありますよ」

「じゃ、そいつも二三十もらって点心にしよう」

女は、ふふっと笑いながら、奥へは行って行き、大きな桶に酒をくんでき、机の上に大きな碗三つと箸三組、そして二皿に盛り分けた肉を出してきた。女はつづけざまに四五へん酒をつぎ、そしてかまどから肉饅頭を蒸籠で一枚ぶんはこんできて机の上においた。

この店こそ問題の殺人居酒屋なのだが、それはさておき、このシーンからも旅の客相手の居酒屋(決して高級店ではない)がどのような様子であったか、うかがえるのではないであろうか。先の例と同様、ここでも酒と肉の組み合わせが出てくる。味付けまでは不明ながら、調理済みですぐに客に出せるような料理が準備されていたことは明らかである。客の人数に合わせてお椀や箸をそろえて出し(卓に最初から置いているのではない)、お酌もするようである。

さて、この武松、のち蔣門神なる男を懲らしめにしよう

とする（第二十九回）。その出立の際に、武松は「蔣門神をやっつけてくれとおっしゃるなら、町を出てから先は居酒屋の前を通るたびに、酒を三杯ご馳走してもらいたいのです。」と言い、これを聞いて、施恩という人物は次のように考える。

「快活林は東門から十四五里もさきだ。その間に居酒屋は十二三軒もある、どの店にも立ちよって三杯ずつひっかけるとなると、まるまる三十五六杯飲んでからやっとむこうに行きつけるという勘定だ。」

街から目的地の快活林までの間、一四～一五里ほどの間に居酒屋が一二～一三軒あるというのであるから、道中、ほぼ一里に一件はあるという割合になる。実際、小説ではこの後まさにそういうペースで居酒屋に入っては武松は酒を飲んでゆく。武松の豪傑ぶりを示そうというエピソードではあるが、ここに語られる居酒屋の布置状況については特別不審なものとしては語られていないので、こういう状況もありえたかと想像してもよいであろう。

最後に付言すると、『水滸伝』には、天秤棒に桶をぶら下げて酒を売りにゆく男が登場する（第十六回）。実はこの酒はしびれ薬入りであって、兵士たちがこの酒を買って飲んで、荷物を奪われる羽目になる。この男、酒を里に持って行って売る、というように話をしており、そのことについてこれも特に不審なこととして語られてはいないので、酒を売って歩く者、あるいは酒のデリバリーサービスがあったことがまた、うかがえよう。飲酒の習慣は、これほどまでに生活に根深く浸透していたものと思われる。『水滸伝』の飲酒関係記事はあまりに多いので、以上で切りあげておく。

本書に掲げられていない、中国の居酒屋関係資料の紹介はここまでとする。不勉強な私でも、これくらいの資料はすぐに思いつく。社会史研究に深い造詣を有する研究者であれば、一層有益な資料の提供が期待できよう（注11）。

### 3 居酒屋研究の意義について

最後に、あらためて本書全体について若干の所見を述べ、その上で今後の課題を確認しておこう。

先述の如く、下田氏は本書において、三つのキーワードを頻繁に掲げる。すなわち、「農村への貨幣経済の浸透」「居酒屋の多機能性」「棲み分け」の三つである。「農村への貨幣経済の浸透」とは、農村に居酒屋が存在することによって農村への貨幣経済の浸透度が測れるということである。「居酒屋の多機能性」とは、居酒屋には銀行や裁判所あるいは共同体の集会所などの役目もあって、単に酒を飲む場ではなかったということである。「棲み分け」はそうした多機能性が居酒屋から分離・独立してゆく意味で用いるという。いずれも下田氏の専門であるヨーロッパ史に関する

分析から抽出した概念として、本来は提起されている。しかしながら、イスラムや中国・韓国、日本を扱った章においても、これらを念頭においた叙述が頻出する。たとえば中国については、「多機能性」については茶館と居酒屋を並べてともに論じており（140ページ）、「農村への貨幣経済の浸透」についても同じ個所で触れられている。下田氏の見解としては、後者については中国の場合否定的で、「居酒屋同様、茶館は農村にはできなかった。あくまで都市の文化であった。」（同）ということになる。

しかしながら、私が先に掲げた資料の例を参考にするならば、そのように見られないことは明白である。私が掲げた例は、そのいずれもが確かな「実話」と限らないことは認めねばならない。しかしながら、話のプロットとして居酒屋は何の違和感もなく登場する。主人公がよく訪れる場所として、人々が集い交友を温める場所として、何よりも娯楽の場として、それは全く不思議でも珍しくもなく、市街にも旅の道中（峠！）にも当たり前のように存在しているのだ。そしてそこは、まさしく酒と食事を楽しむ場である。資料は引かなかつたものの、妓女が客の相手をする店もあり、風俗店のような事例ももちろん存在した。しかし、居酒屋といえば、友人・仲間とともに酒を飲み食を楽しむ、そういう場としての役割こそが中心であつたとみて間違いはない。

中国の例からすれば、「農村への貨幣経済の浸透」という問題を居酒屋によって測ることは必ずしも適切ではない、ということもまた言えよう。劉邦の話のように、紀元前から農村にも居酒屋が存在して「つけ」による支払いまであり得たと言うなら、中国の経済はヨーロッパの段階を超えること、余りに甚だしい進みようであると言わねばならない（注12）。農村と居酒屋の問題は、貨幣経済うんぬんという問題と切り離して考えるべきである。下山氏は「私は、『農村への貨幣経済の早くからの浸透』がヨーロッパ近代文明飛躍の鍵であると思っている。」と述べるが（217ページ）、中国の事例を考えるならば、その見解は妥当とは言えまい。

また、「古代オリエント、古代ギリシア・ローマ、ビザンツ帝国、イスラム圏、インド、中国、韓国、日本、どの文明圏でも、程度の差はあれ、居酒屋は下賤な場所、すくなくとも健全でない場所として認識された。これは客人は無償で接待するのが当然とする精神の裏返しで、その意味で人類共通であろうと思われる。」（217～218ページ）との指摘があり、ほぼ氏の結論に近い見解かとみなされる。しかし、これが中国には全く当てはまらないことは、私が先に引いた少ない例からでも明白である。居酒屋は下賤でもなければ不健全でもない、酒と肴を味わいつつ、男たちが集い交流を深める、むしろ人間関係形成の最適な場所であつた。また、下田氏の言う無償接待というのも、いささか理解に苦しむところがある。氏の言い方によれば、金銭のやり取りをともし酒のもてなしはすべて賤しいかのように見える。しかし、自宅での接待ならば当然客から金を

取ることはないし、店での接待ならば主人格の者が払いをすることでホスピタリティーは確保される。中世ヨーロッパにおけるキリスト教的なホスピタリティーとは別次元の飲食接待文化が、別時代別地域に存在していたことこそむしろ当然であろう。後漢の劉寛の話を引きいた際に確認したように、朝廷の大官である彼でさえ、自宅の客をもてなすのに奴隷に酒を買いに行かせているのであり、金銭によって酒を購入・調達することはごく普通であったと思われる。そもそも、居酒屋（酒肆）は漢詩の重要な題材であり、最高の教養人たちがその詩の中に居酒屋を読み込むことは普通である。少なくとも中国においては、下賤な対象ではない。

下田氏の挙例を見る限り、ヨーロッパの居酒屋は、娯楽をはじめとする雑多な要素が展開される「場」としての機能が重要であるように思われる。それはまさしく氏の言う「居酒屋の多機能性」であり、「居酒屋が人びとのコミュニティセンターであった」（218ページ）との指摘はその通りである。しかし、そうなると「飲酒に関しては必ずしも主目的ではない居酒屋」という、皮肉な一種の逆説が生じているようにも見える。そのため、「居酒屋そのもの」の研究ではなく、「コミュニティセンター」の研究が主であり「居酒屋」が従になるというきらいもないではない。その一種の皮肉が、結局、居酒屋そのものの当時における意義についての言及を少なくしてしまったのではないか、という気もする。

本書に先立って、下田氏にはヨーロッパ、特にドイツを中心とした研究があり、それを踏まえて本書も成立したのであるが、そのヨーロッパに関する結論を他地域にもそのまま適用させ過ぎではないか、というのが正直な感想である。ないし、本書の帯に「居酒屋を覗くとヨーロッパ文明が見える」と端無くも大書してあるように、やはり本書は「世界史」ではなくヨーロッパ史の本であったのであろう。その自覚が強ければ、非ヨーロッパ圏については若干言及するだけでよく、その代わり、ヨーロッパへの検討で得られた結論を当てはめることを控えるべきであった。世界各地域・各時代における独自性こそ、まずは列挙してみるべきではなかったであろうか。その多種多様ぶりが、酒をめぐる文化の複雑さと豊穡さを教えてくれると考える。なお、下山氏の著書に導かれ、居酒屋という場をここでは問題としたのであるが、対象を「酒」そのものに拡大するならばいっそう多様にして奥行きのある材料が集まることとなろう。それはあるいはまた別の機会に試みることにしたい。

先述の如く、本書のテーマの持つ意味の大きさは十分なものであり、今後のさらなる成果を期待したいと願うものである。本書において下田氏は、居酒屋そのものについても、そして居酒屋の日常のありようについても、いささか興味が薄いように感じられる。重大事件と結び付くその部分に関心が傾きがちに感じられ、そこが私として不満であ

る。そして、下田氏が触れない、別な観点から、私は中国史における居酒屋研究の意味を考えているところである。居酒屋を対象とすることは、そこに集う人々の人間関係形成の問題として、歴史研究上に大きな意味を持つと思われる。革命とか反乱とかの年表にも載るような重大事件ではなく、日常そこでどのような人間関係が形成されたかを探ることで、当時における価値観や行動様式のあり方がわかると考えられるからである。酒の上での諍いもあるのももちろんではあるが、出会ってすぐに意気投合して義兄弟の契りを結ぶこともあり、志を同じうする男たちの結合を形成する話が、私の専門である中国史の関連資料にはむしろふんだんに見える。事件に直接結びつくような場であるよりも、男たちが集い友情や信義を確認し強めてゆく、そういう場として機能しているように思われる。そこは賤しい場所でもなければ、不健康な場でもない。店に接客の女性がいるにしても、客である男性の関心は連れ立ってゆく仲間たちにこそ向かう。劉邦の話もそうであるし、何より『水滸伝』に数多く見えるエピソードによれば、居酒屋がまさしくそうしたホモソーシャルな関係の場であることは明らかである（注13）。交友関係を結ぶ対象としての異性の排除を特徴とするホモソーシャルの概念は、『水滸伝』はもとより『三国志通俗演義』にも強く見えており、中国における人間関係形成論分析に有効であると私は考えている。男たちが集って、痛飲しながら胸襟を開いて語り合う、その場は必ずしも自宅ではなく、居酒屋であることが多いように見える。その社会的な機能をこそ、中国史における居酒屋研究は明らかにせねばならない。居酒屋は、社会経済史的なレベルを決定する指標として有効なのではなく、そこに登場する人々の人間関係の形成と展開を示すものであり、その地域的・時代的な個性を描き出すことが今後の課題である、と考える。

## 注

- 1 下田淳『居酒屋の世界史』講談社現代新書、2011年8月。
- 2 下田淳『ドイツの民衆文化』昭和堂、2009年11月。
- 3 例えば、映画やCMでもよく使われ多くの人になじんでいると思われる、カール・オルフの『カルミナ・ブラーナ』は、第二部は「居酒屋にて (IN TABERNA)」と題して、中世ドイツの居酒屋を舞台に、そこでの悲喜こもごもの様子が猥雑さも交えて強烈に表現されている。この著名な作品がなぜ取り上げられないのか、と訝る音楽好きの読者も多いのではないかと。オルフのカウンタータ『カルミナ・ブラーナ』は、中世ドイツの世俗的歌集である『カルミナ・ブラーナ』をテキストとした、1936年の作品。第二部は「居酒屋にて」と題され、男声の独唱と合唱を交えた、刺激的な音楽が付されている。そのうち、「われら、居酒屋にあっては」の部分の歌詞を掲げておこう（以下、石井歆氏の訳に

よる。リッカルド・ムーティ指揮フィルハーモニア管弦楽団のディスクのライナーノートから採った)。中世居酒屋の放縦にして猥雑なること、一見して伝わってくるであろう。

われわれが居酒屋にいる時は 場所がどこかは気にしない

そして、すぐ賭を始める。賭は、汗をかくものだ。居酒屋の中の出来事 金が執事のその居酒屋でのことなら、ここでたずねるがよい。

私が教えたら、聞くがよい。賭をする者、酒を飲む者、あるいは両方楽しむ者もいる。

だが賭をしに残っている者の中には 着物をとられた裸の者もいれば

まだ着ている者もいる、金袋で体をおおう者もいる。

そこでは誰も、死を恐れない、皆、バカスのためにくじを引く。(中略)

主婦も飲む、主人も飲む、兵隊も飲む、牧師も飲む、この男も飲む、あの女も飲む、

下男も飲む、女中も飲む、すばしこい男も飲む、のろまも飲む、

白人も飲む、黒人も飲む、常連も飲む、立ち寄りも飲む、まぬけも飲む、賢者も飲む。

貧乏人も、病人も飲む、追放者も、よそ者も飲む、少年も飲む、白ひげも飲む、僧正も飲む、

司祭長も飲む、姉も飲む、兄も飲む、老人も飲む、母も飲む、

あの女も飲む、この男も飲む、百人も飲む、千人も飲む。

六百ペンスは少なすぎて 長持ちしない、放縦に限度なくみんなが飲む時は、

愉快地に飲めるだけ飲ませるがよい。

このように人は、皆われわれを苦しめる そのためとても貧しくなるのだ。

- 4 居酒屋主人の置かれていた微妙な立場については、阿部謹也『中世を旅する人びと』(初出1978年)の「II 旅と定住の間に」の「4 居酒屋・旅籠」が夙に指摘している。

- 5 中国で運送に携わりかつ用心棒的役割も果たした鏢客が秘密結社組織でもあったことについては、相田洋氏の『橋と異人』(研文出版、2009年)の「第三章 中国の用心棒」に詳しい。

- 6 劉邦の出身である沛県(現在の江蘇省沛県)は、水陸の交通の要衝に位置しており、当時、一万戸以上の大県には長官として県令が置かれた(一万戸以下には県長)が、沛県にはその県令が置かれていた。秦代の地方社会については、藤田勝久氏の『項羽と劉邦の時代』(講談社、2006年)が最近の研究成果も取り入れつつ、わかりやすく解説している。

- 7 武負は武が姓で、負は『史記』の注によれば「則ち古語に老母を謂いて負と為す。」とあり、名ではなく、老女のことを言う。王媪の媪はこれも老女の意味である。今でもありそうな居酒屋風の名にすれば、「武かあさんの店」とか「王お婆さんの店」とかいうことになる。なお、このあたり、佐竹靖彦氏の『劉邦』(中央公論新社、2005年)の「第四章 沛県の亭長」, 107~110ページが、『史記』の注釈を駆使しながら、いかにも巧みに様子を活写している。

- 8 特に王朝を創始した皇帝の出生などに関して多くの異常な話があることは、竹内康浩『正史はいかに書かれてきたか』(大修館書店、2002年)に述べておいた。

- 9 注に引く『竹林七賢論』なる書に、同時代にはこうした話は聞いたことがなく、晋の南遷後に初めて聞いたという庾亮(289~340)の証言を載せている。王戎の生没年(234~305)をあわせ考えると、王戎と庾亮との交友が深かったとも思われず、庾亮の証言の意味もどれほど重いものであるか、いささか疑問はある。

- 10 以下、『水滸伝』は、駒田信二氏の訳(平凡社、中国古典文学大系、所収)を用いた。

- 11 宋代の都である開封を描いたとされる張昞端の「清明上河図」には酒を提供する店の様子が見える。伊原弘編『「清明上河図」をよむ』(勉誠出版、2004年)など、多くの研究書も出て、大いに研究が進んでいる資料である。本書では「清明上河図」の一部が137ページに図30として掲げられているけれども、当然、こういう資料を中心にして叙述しなければならない。また、同時代の文献資料であれば孟元老の『東京夢華録』もあり、入江義高氏らによる詳細な注を付した訳本もある(岩波書店、1983年。平凡社東洋文庫、1996年)。『東京夢華録』には飲食店が供した各種のメニューまで載せられており、情報量はそれなりにあると言わねばならない。

- 12 嘗て1950年代に中国で盛んに行われた「資本主義萌芽論争」においては、戦国時代末期の大都市の様子から、中国においては紀元前から資本主義が成立していたとする、恐るべき極端な論もあった。

- 13 無論、店の女性目当てのケースもあったには違いない。李白の有名な「少年行」という詩に、「五陵の年少、金市の東、銀鞍白馬、春風を渡る、落花踏み尽くして、何れの処にか遊ぶ、笑って入る、胡姫酒肆の中。」とあり、この場合には胡姫(西域出身の女性)目当てということになるのかもしれない。それでも、少年たちが連れだって店に乗り込んでいるところに、単なる女性目当てを超えて、ホモソーシャル的な展開を想起させないことはない。あるいは、「高嶺の花」を射止めることで男性グループ内での地位が上昇するというケースこそがまたホモソーシャルの一つのパターンでもあるから(イヴ・セジウィック『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版

会, 2001年, を参照のこと), そういう意味においても,  
李白の詩の少年たちの行動は単なる女性目当てとばかりは言えない。